

L. M. モンゴメリと歩行

松 崎 慎 也

L. M. Montgomery and Walking

Shinya MATSUZAKI

はじめに

L. M. モンゴメリ (Lucy Maud Montgomery, 1874-1942) は1914年4月15日の日記で、その晩読んだ文芸誌『ブックマン』(*The Bookman*) 中の“Confessions in a Album”という、著名人に対して尋ねられたプライベートな質問を紹介する記事に触れながら、自分でも記事中にあがっていた質問の幾つかに遊びで回答し、それを書き記している(1910-1921 145-146)。¹そして質問中の“Your favorite amusement?”という問いに対して、“Reading and walking in the woods are ties.”(146)と「告白」している。

この回答の前者、読書愛については、それが幼少期から始まったことを自伝『険しい道』(*The Alpine Path*, 1917年出版)でも、“It goes without saying that I was passionately fond of reading.”(48)と述べている。読書愛は、モンゴメリが創造し、作者を部分的に反映する文学少女たち、アン・シャーリー (Anne Shirley)、ストーリー・ガール (Story Girl) ことセーラ・スタンリー (Sara Stanley) や、エミリー・スター (Emily Starr) の中にも見て取れる。小説内には彼女たちが読書をする姿や、彼女たちが詩人・作家を引用する場面が多く描かれている。²

回答の后者、木立の中を歩くことの方はどうであろう。少し意識して眺めてみると、モンゴメリの小説内には作者の好みを反映するかのような、森の小径や並木道を歩く場面が多数描かれていることに気がつく。自然の中の遊歩以外にも含めると、登場人物たちの歩く姿がモンゴメリの小説内の至る所に散りばめられていることがわかる。また、モンゴメリの日記中にも散策の記録は多い。

文学における歩行の問題を扱った研究としては、歩行の文化史を綴るモリス・マーブルズ (Morris Marples) やレベッカ・ソルニット (Rebecca Solnit)、ジョウゼフ・A・アーマートウ (Joseph A. Amato)、マーリン・カヴァリー (Merlin Coverley) の研究、主にロマン主義以降のイギリス文学における歩行を扱ったアン・D・ウォレス (Anne D. Wallace) やジェフリー・C・ロビンソン (Jeffrey C. Robinson)、ロビン・ジャーヴィス (Robin Jarvis) の研究があり、また、ダンカン・ミンシュル (Duncan Minshull) が編んだ歩行に関する文学選集などもある。モンゴメリも上記著作の中に登場する作家たちと同じく、歩くことを愛した作家の一人に数えられると思うのだが、上記文献中には、自治領カナダ時代のプリンスエドワード島出身のこの作家への言及はない。

本論では、作家モンゴメリとモンゴメリ作品における歩行の問題を扱う。モンゴメリにとって歩くこととはどのようなものであったのか、作者が歩くことを好んだことは小説にどのように反映されているのか、また、歩行という身体経験がモンゴメリの小説内ではどのように機能しているのか考察していく。

モンゴメリは写真を写すことも趣味としていた。モンゴメリの残した写真の分析を通じて、この作家の物の見方と創作の方法とを考察しているエリザベス・ロリンズ・エパリー (Elizabeth Rollins

Epperly) は、「恋人たちの小径」(Lover's Lane) とモンゴメリ自らが名付けた場所を撮影した写真に、モンゴメリが好んで反復する構図のパターンが凝縮されていると論じている (5)。グリーン・ゲールブルズのモデルになった家、母方のいとこの家の南側に延びていたのが「恋人たちの小径」で、小説内にも同名の小道が登場する。エパリーによると、モンゴメリが撮影した「恋人たちの小径」の写真には、〈道の曲がり角〉、〈日光が差し込む、遠くの本々を作る還状や鍵穴状のすき間〉、〈枝の曲線によるアーチの道〉という主要な三パターンが見られる (5)。

そして、これらの視覚的パターンは小説内の比喩的なパターンと結びついていると、エパリーは言う (6)。具体的にこれはどういうことかと言うと、例えば〈道の曲がり角〉であれば、『赤毛のアン』(*Anne of Green Gables*, 1908年出版) の最終章は、その章タイトルも「道の曲がり角」(The Bend in the Road) であるのだが、小説の結びは主人公アンのまだ見通すことのできない未来について、視覚的な比喩を用いながら、“Anne's horizons had closed in...” (245) や、人生を道に喩えて “And there was always the bend in the road.” (245) と語る。このような点を前提に、エパリーは、“A network of images throughout the novel [*Anne of Green Gables*] makes Anne's final transformation of a winding path into the metaphorical ‘bend in the road’ possible and inevitable.” (103) と述べ、モンゴメリが写真で好んだ視覚的パターンが小説内で頻繁に用いられるイメージでもあり、それらのイメージが小説のテーマとも結びつく比喩的な意味を持ちながら作品内に浸透し広がっているとしている (103)。

本論では、エパリーの上記の指摘に示唆を受けつつ、この視覚的イメージに加え、〈道を歩む〉という身体経験がモンゴメリ作品に広く行き渡っていることから、歩行という運動イメージを生営みに喩えることも、モンゴメリ文学にしばしば見られる特徴であることを論じたい。

以下、第一章では、モンゴメリが残す日記などの記述から、モンゴメリにとって歩くこととはどのようなものであったのかを見ていく。第二章では、作者の好んだ歩行が作品内でどのように反映されているのかを見る。続く第三章では、歩くことの、小説内での機能について考察する。モンゴメリ文学内の歩行に注目するこの考察が、モンゴメリの創作方法の一側面を理解するための一助になればと願う。

I

先に触れた『ブックマン』の記事を用いての自問自答は、『赤毛のアン』の出版で一躍人気作家になった後の執筆活動や、牧師の妻としての勤め、そして子育てなどから多忙を極めた、遊歩を楽しむ余裕などない生活の中での気晴らしであり、「告白」だったのだが、14歳のときから綴られているモンゴメリの日記の中には、彼女が木々に覆われた小径の散策を楽しむ姿が多く記されている。36歳で結婚してプリンスエドワード島を離れるまでは、島のキャヴェンディッシュ (Cavendish) の母方の祖父母の家で長く暮らし、近隣の野や森の散歩をモンゴメリは愛した。

16歳の秋の日の日記には、昼食の後にそぞろ歩きを楽しんだという書き込みの最後に、“I do love rambling all alone by myself through the woods.” (1889-1900 104) と記している。この日も訪れているのは「恋人たちの小径」で、そこがモンゴメリの最も愛した散歩場所だった。二年後の日記には、

Surely, it [Lover's Lane] is the prettiest spot in the world. Apart from its beauty I have a strange love for it. In those divine woodland solitudes one can hear the voice of one's own soul—the voice of nature—the voice of God. I wish I might go there every day of my

life—I always feel better after a stroll under those green arches where nature reveals herself in all her beauty. (1889-1900 165)

と、「恋人たちの小径」をただ一人で歩くことがもたらす、心への大きな効用について記している。六年後の1899年の日記の中でも、楓、樺、トウヒなどがアーチを作り、小川の仄かなせせらぎが聞こえるこの小径の散策の効能について、“No matter how dark my mood is, no matter how heavy my heart or how vexed my soul, an hour in that beautiful solitude will put me right with myself and the world. Perplexity and sorrow melt away and the balm of the woods falls on my troubled thoughts like a boon of infinite peace.” (1889-1900 445) と言い、そこで一時間ほど一人で過ごすことが、心を癒してくれると繰り返している。

結婚して妻となり、母となった身では、一人で歩くという時間を作ることが困難になっていったようだ。日記には散策の記録が見当たらなくなっていく。牧師の妻としての様々な会合への出席、育児、その合間の時間をやりくりしての執筆活動、第一次世界大戦が起こる中での恐怖と不安、夫の精神的不調、さらには自身の精神的不調というように、日記には苦しみの時間の記録が多くなっていく。

1925年7月15日の書き込みには、夫の最初の赴任地として暮らしていたオンタリオ州リークスデール (Leaksdale) から、合同教会に関わる会合に出席するためカークフィールド (Kirkfield) をその前日に訪れたことが記され、初代トロント市長を務めたウィリアム・マッケンジー (Sir William MacKenzie) が元住んでいた屋敷で行われた会合の後のこととして、“We went for a walk through a most beautiful long lane of lombardies on the MacKenzie estate. It was the part of the day I enjoyed the most. How I miss out of my life now the long intimate walks through woods and secluded fields” (1921-1929 239) と書いている。安らぎのひとつときだった、木立の中の遊歩が、めったにかなわなくなった日々をモンゴメリは送っていることがわかる。

1927年7月、モンゴメリは4年ぶりに故郷キャヴェンディッシュに戻る。15日の日記には、この日が記憶の中で“fixed stars” (1921-1929 342) のように輝き続ける一日になったとして、一人散策を楽しんだ様子を書き込んでいる。

... I picked up strawberries along the road from here to the church the whole afternoon. The sides of the roads and the old dykes are red with them. I was perfectly happy and—what is more than and distinct from happiness—perfectly *satisfied*. My soul was home. I was young again—a girl again—it was the old Cavendish I picked strawberries in. The breeze that blew over the clover fields was as the very water of life to me—old joy was mine again such as I knew in the beautiful days before I had learned the bitter lesson that joy could die. This afternoon alone was worth coming to P. E. Island for . . . (1921-1929 342)

困難な日常から一時離れて一人になり、故郷の自然を今再び全身で味わうことができた大きな喜びがここには表現されている。

1937年、『赤毛のアン』が有名にしたプリンスエドワード島は、アンにゆかりのある場所を保存する形でその一部が国立公園となる。その前年、島を訪れたときの日記でモンゴメリは、キャヴェンディッシュの愛する森の小径がもう自分のものではなくなることを悲しみつつ、ここをもう二度と歩むことはないかもしれないと言いながら過去を振り返り、

I roamed them as a child—as a dreaming girl—as a sad woman seeking peace and resignation in them. I “thought out” poems and stories there—many a chapter for Anne. I went there in joy and sorrow. They never failed me. I never failed to find comfort and understanding and healing for mind and soul there. . . . Beloved solitudes—farewell!
(1935-1942 100)

と、避難と癒しと、作品の想を練るための聖所だった小径に別れを告げている。モンゴメリが歩きながら、ときに声を出して創作していた姿は、オンタリオ州ノーヴァル (Norval) 居住時代の隣人にも目撃されている (Heilbron 118-119)。上の引用部分は、モンゴメリが歩行中に作品を構想する習慣があったことも告げ、モンゴメリ的歩行経験のまとめのような記述になっている。

1939年のプリンスエドワード島再訪（これが本当に最後の訪問となる）の折りに、長きに渡る文通相手でジャーナリストの G. B. マクミラン (George Boyd MacMillan) に送った葉書で、第二次世界大戦の勃発を憂いながら、“Come for a walk with me on this shore tonight and we will forget for an hour the nightmare that has been loosed on the world.” (Bolger 199) と書いている。これが、モンゴメリの書き残した中で、歩くことに関して直接触れ、その慰藉の力に言及した恐らく最後のものになると思われる。

II

プリンスエドワード島に住む三人の、モンゴメリの分身たちは、作者の散策愛を受け継いでいるようだ。1909年出版の『アンの青春』 (*Anne of Avonlea*) では、16歳のアンは教員生活一年目で、学校での苦労も多いのだが、特に問題の起こることもなく平穏だった一日の帰り道を以下のように独り、声を出しながら歩いている場面がある。

“What a nice month this November has been!” said Anne, who had never quite got over her childish habit of talking to herself. “November is usually such a disagreeable month. . . . This year is growing old gracefully. . . . We’ve had lovely days and delicious twilights. . . . How dear the woods are! You beautiful trees! I love every one of you as a friend.” (96-97)

この後、アンは、樺の若木の幹に口づけをする。そして、そんなアンを見ていた親友のダイアナ・バリー (Diana Barry) から、一人でいると少女のままだからかわれている (97)。

セーラの登場するストーリー・ガール・シリーズは、登場時13歳の少年ベヴァリー・キング (Beverley King) が語り手であるため、セーラが誰かとともに歩く場面は多数描かれるけれども、セーラ一人の遊歩について描写される場面は見当たらない。しかし、『ストーリー・ガール』 (*The Story Girl*, 1911年出版) の中の、セーラの次のセリフから、彼女も散歩を愛していることがわかる。子どもたちがスティーブン伯父の散歩道 (Uncle Stephen’s Walk) と呼ばれるリンゴ並木にやって来たとき、“‘When the blossoms come out it’s wonderful to walk here,’ said the Story Girl. ‘It’s like a dream of fairyland—as if you were walking in a king’s palace.’” (17) とあり、セーラが花の季節のこの道の散歩を気に入っていることがわかる。

自伝的要素がアン・シリーズ以上に色濃いとされるエミリー・シリーズにおいて、10歳のエミリーについては『可愛いエミリー』 (*Emily of New Moon*, 1923年出版) の中で、“‘Real’ talks with

Father were always such delightful things. But next best would be a walk—a lovely all-by-your- lonesome walk through the grey evening of the young spring.” (4) と語られ、彼女の散策愛とそして、作者と同じく特に一人による散策を好むことが明言される。また、エミリーは散策途中で詩作もする。まだ春には遠い季節であったが、“Oh, I smell spring!” (*New Moon* 227) と声を出しながら、小川に沿った小径を歩いていると、やがて “she began to compose a poem on it [spring]” (*New Moon* 227) と構想を練り始める。

エミリーは（これもまた作者モンゴメリと同様に）日々の出来事を日記に記す生活を送っている。もうすぐ14歳になる、エミリーの二月の日記には、

I had a lovely time with myself this evening, after school, walking on the brook road in Lofty John's bush. The sun was low and creamy and the snow so white and the shadows so slender and blue. I think there is nothing so beautiful as tree shadows. And when I came out into the garden my own shadow looked so funny—so long that it stretched right across the garden. I immediately made a poem of which two lines were,

*“If we were as tall as our shadows
How tall our shadow would be.”*

I think there is a good deal of philosophy in that. (*Climbs* 17)

というように、茂みの散歩途中の詩作について記されている。

歩行が慰安をもたらしている例としては、『エミリーはのぼる』(*Emily Climbs*、1925年出版)の第10章の場面をあげることができる。エミリーは、高校へ通うためにシュルーズベリー(Shrewsbury)でルース伯母(Aunt Ruth)と暮らしている。ある日、エミリーが芝居に出演することを巡ってルース伯母と言い争いをし、エミリーは夜、以前住んでいたニュー・ムーン(New Moon)へ帰ることを決意する。ニュー・ムーンへの7マイルの距離を、憤りを感じながらエミリーは歩いていく。ニュー・ムーンに到着して、仲の良い従兄のジミー(Cousin Jimmy)に不満を聞いてもらおうと落ち着き、またシュルーズベリーへ歩いて戻っていく。帰りの歩行は、怒りとともにあった行きの歩行とは異なり、“She had expected the walk to be dreary and weary, robbed of the impetus anger and rebellion had given. But she found that it had become transmuted into a thing of beauty . . .” (150-51) と語られる。そして、明け方も近づき、“So, having washed her soul free from bitterness in the aërial bath of the spring night and tingling from head to foot with the wild, strange, sweet life of the spirit, she came to Aunt Ruth's when the faint, purplish hills east of the harbour were growing clear under a whitening sky.” (152) と、心は癒されている。

ここまで、モンゴメリの歩行が分身たちに引き継がれている様子を見てきたが、次ぎに、これとは別の形の反映の例として、『アンの想い出の日々』(*The Blythes Are Quoted*、1942年完成、2009年出版)の中に引かれる、ワーズワスのな逍遥詩を取り上げたい。アンの文学的才能を受け継いだ次男のウォルター(Walter Blythe)が残したとされている詩の幾つかの中で、話者である「私」は一人そぞろ歩く。詩行の例としては、“I walked again beside / The dark enchantress, Night, / Until the dawn's white pride / Brought back a lost delight.” (365) や“*Oh, but we were rare good comrades, that gallant wind and I, / As hand in hand we wandered till roguish stars were*

winking / Between the scurrying cloudlets in the sky.” (371) などである。「話者」は孤独の歩行を愛している。

また、アン作とされるもので、夫ギルバート (Gilbert Blythe) にウォルターの詩を思い出されると言わせた詩も、一人歩きの詩であり、その冒頭は、“*Out in the ways of the wind went I, / And its elfin voices sang to me, / I heard it calling from far and nigh / In wild sweet notes that rang to me.*” (396) と始まっている。

III

単に分身がモンゴメリの歩行を反映しているだけではなく、歩くことはモンゴメリの創り出した小説の中に充満している。そして、歩くことが小説の展開上、重要な機能を果たしている例も多く見受けられる。例えば印象的な場面として、『赤毛のアン』の結びで、グリーン・ゲープルズへ向かう小径をアンとギルバートが共に歩き、二人が和解するシーンがある。アンとダイアナが深い友情を育んだことが「恋人たちの小径」をともに歩んだことと重ね合わされてもいるように、一人で歩くことを愛した作者の好みとは異なり、小説内での歩行は人と人をつなぐ役割を果たすことが多い。

『アンの青春』の第21章における、ラヴェンダー・ルイス (Lavendar Lewis) との出会いの場面でも、アンの新たな人とのつながりが歩行によって演出されている。友人から土曜の夕食に誘われた、アンとダイアナは友人宅まで4マイル弱の道を歩いていくことにするものの、途中で道を間違えたことによる偶然によって、ラヴェンダーの住む「こだま荘」(Echo Lodge) に辿り着き、後に深い親交を結ぶことになるラヴェンダーと運命的に出会う。

また、『アンの夢の家』(Anne's House of Dreams、1917年出版)の第10章は、結婚したアンとギルバートが暮らす漁村フォー・ウィンズ (Four Winds) の海岸にアンが散歩に出かけようとしているところから始まり、“Many and delightful had been her shore rambles... sometimes alone with her own thoughts and new, poignantly-sweet dreams that were beginning to span life with their rainbows.” (81) と、人との散歩も楽しいが、一人の散歩には特別な喜びもあるのだと思いつつ海岸に出かけ、自分しかいないだろうと海岸で歌い踊っていると、同じように一人散歩に来ていた、数奇な運命を辿る女性レズリー・ムーア (Leslie Moore) と偶然出会う。

歩行中の運命的出会いは、アン・シリーズに限らず、『果樹園のセレナーデ』(Kilmeny of the Orchard、1910年出版)の第5章で、主人公エリック・マーシャル (Eric Marshall) が夕方散歩に出て、偶然立ち寄った果樹園でキルメニー・ゴードン (Kilmeny Gordon) と出会ったように、一つの仕掛けとして小説内で使われている例は多い。

先に触れた、人生における見通しのつかない未来、あるいは、人生における新たな展開を意味する「道の曲がり角」の比喩は、歩く場面の会話によく登場する。登場人物たちの歩行経験からの連動で、自然と口から出てきたかのようなのである。『アンの青春』では、アンとアラン (Allan) 牧師夫人が歩いているときに (173)、『アンの愛情』(Anne of the Island、1915年出版)では、アンとギルバートの散歩中の会話で使われる。『アンの幸福』(Anne of Windy Poplars、1936年出版)の中で、心を閉ざしたままの、学校の同僚、キャサリン・ブルック (Katherine Brooke) をアンはクリスマスにグリーン・ゲープルズへ招く。アンとキャサリンが夕食後に雪道の散歩に出た場面の休憩途中の会話内に、「道の曲がり角」の比喩が登場する。

キャサリンとともに「恋人たちの小径」も通るこの散策は、“It seemed to both [Anne and Katherine] that they were leaving behind a world that had nothing in common with the one to

which they were returning . . . where souls communed with each other in some medium that needed nothing so crude as words.” (*Windy Poplars* 148) と、二人に感じさせ、これによりキャサリンは心を開いていく。自然のつくり出す美しい冬景色とともに歩行は、慰藉効果を発揮し、また、アンとキャサリンの心をつなぐ役割も果たして、小説内での歩行の機能が凝縮されたシーンとなっている。

「道の曲がり角」に限らず、モンゴメリは人生を歩行でイメージ化することを好む。自伝『険しい道』の冒頭で、自分の人生を “my long, uphill struggle” (9)、“‘hard and steep’ path” (10) と呼び、自分の人生を語ることが、“some other toiler who is struggling along in the weary pathway I once followed” (9)、“another pilgrim along that path” (10) のために役立つことを願っている。また、『黄金の道』(*The Golden Road*、1913年出版)の前書きでは、“Once upon a time we all walked on the golden road. It was a fair highway, through the Land of Lost Delight ; shadow and sunshine were blessedly mingled, and every turn and dip revealed a fresh charm and a new loveliness to eager hearts and unspoiled eyes.” (vii) というように青春時代について語られる。

モンゴメリが幼いときに何度も読み返したバニヤンの『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*) は (*Alpine* 49)、『可愛いエミリー』の中で “Many time had she [Emily] walked the straight and narrow path with Christian” (3) と言われるように、エミリーも愛読しているという設定になっている。巡礼の比喩は、アンが、独身最後の日にするグリーン・ゲープルズ周辺の散策に関して、“she had a little pilgrimage to make on this last day of her girlhood and she must make it alone” (*Dreams* 22) と語られるように、頻繁に使われるイメージである。

自伝のタイトルの元となった、モンゴメリが子どものときに雑誌から切り抜き、人生の指針だったと語る詩の中のフレーズで (*Alpine* 10)、エミリー・シリーズのキー・フレーズでもある「険しい道」(the Alpine path) や、「道の曲がり角」などの視覚的イメージの比喩と連動する形で、人生を歩行という運動イメージに喩えることが、モンゴメリ文学に広く行き渡っている。

おわりに

本論ではモンゴメリの創作法の一側面を理解するためにモンゴメリ文学における歩行の問題を考察した。モンゴメリの歩行に関しては、上述した特徴の見られるモンゴメリ的歩行が、歩行の文化史の中でどのように位置づけられるのかという問題も残っている。これについての考察は、今後の課題としたい。

註

- 1 『ブックマン』は、インターネット上のアーカイブサイト *A Free Website for Periodicals, Books, and Videos* にて公開されており、このサイトで調べると、モンゴメリが言及している記事の著者はローラ・ステッドマン (Laura Stedman) で、記事は1913年4月号の『ブックマン』に掲載されている。記事を参照すると、モンゴメリは紹介されているすべての質問に対して回答しているわけではないことがわかる。
- 2 アン・シリーズに関しては、どのような作者の、どのような作品からの引用、引喩がなされているかについての研究として、レイ・ウィルムシャー (Rea Wilmshurst) の先駆的論文や、松本侑子によるアン・シリーズ翻訳に付された注釈および同氏の著書『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』がある。

引用文献

- Amato, Joseph A. *On Foot : A History of Walking*. New York : New York UP, 2004.
- Bolger, Francis W. P., and Elizabeth R. Epperly, ed. *My Dear Mr. M : Letters to G. B. MacMillan from L. M. Montgomery*. Toronto : Oxford UP, 1992.
- Coverley, Merlin. *The Art of Wandering : The Writer as Walker*. Harpenden : Oldcastle Books, 2012.
- Epperly, Elizabeth Rollins. *Through Lover's Lane : L. M. Montgomery's Photography and Visual Imagination*. Toronto : U of Toronto P, 2007.
- Heilbron, Alexander. *Remembering Lucy Maud Montgomery*. Toronto : Dundurn P, 2001.
- Jarvis, Robin. *Romantic Writing and Pedestrian Travel*. 1997. London : Palgrave Macmillan, 2000.
- Marples, Morris. *Shanks's Pony : A Study of Walking*. London : J. M. Dent and Sons, 1959.
- Minshull, Duncan, ed. *The Vintage Book of Walking*. London : Vintage, 2000.
- Montgomery, Lucy Maud. *Anne of Avonlea*. London : Penguin, 2009.
- . *Anne of Green Gables*. Ed. Mary Henley Rubio and Elizabeth Waterston. New York : Norton, 2007.
- . *Anne of the Island*. London : Penguin, 2009.
- . *Anne's House of Dreams*. London : Penguin, 1994.
- . *Anne of Windy Poplars*. New York : Bantam, 1998.
- . *Emily of New Moon*. New York : Dell Laurel-Leaf, 1993.
- . *Emily Climbs*. New York : Bantam, 1993.
- . *Kilmeny of the Orchard*. New York : Bantam, 1993.
- . *The Alpine Path : The Story of My Career*. 1917. Markham : Fitzhenry and Whiteside, 2003.
- . *The Blythes Are Quoted*. Toronto : Viking Canada, 2009.
- . *The Complete Journals of L. M. Montgomery : The PEI Years, 1889-1900*. Don Mills : Oxford UP, 2012.
- . *The Golden Road*. Toronto : Bantam, 1989.
- . *The Selected Journals of L. M. Montgomery, 2 : 1910-1921*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. Toronto : Oxford UP, 1987.
- . *The Selected Journals of L. M. Montgomery, 3 : 1921-1929*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. 1992. Don Mills : Oxford UP, 2003.
- . *The Selected Journals of L. M. Montgomery, 5 : 1935-1942*. Ed. Mary Rubio and Elizabeth Waterston. Don Mills : Oxford UP, 2004.
- . *The Story Girl*. Toronto : McClelland-Bantam, 1987.
- Robinson, Jeffery C. *The Walk : Notes on a Romantic Image*. 1989. London : Dalkey Archive P, 2006.
- Solnit, Rebecca. *Wanderlust : A History of Walking*. 2000. New York : Penguin Books, 2001.
- Stedman, Laura. "Confessions in an Album." *The Bookman* April 1913 : 126-132. *A Free Website for Periodicals, Books, and Videos*. UNZ. org. 17 Sep. 2013 <<http://www.unz.org/Pub/Bookman-1913apr-00126>>.
- Wallace, Anne D. *Walking, Literature, and English Culture : The Origins and Uses of Peripatetic in the Nineteenth Century*. 1983. Oxford : Clarendon, 2011.
- Wilmshurst, Rea. "L. M. Montgomery's Use of Quotations and Allusions in the 'Anne' Books." *Canadian Children's Literature* 56 (1989) : 15-45.
- 松本侑子, 訳『赤毛のアン』L・M・モンゴメリ作, 東京 : 集英社, 2000.
- 『赤毛のアンに隠されたシェイクスピア』東京 : 集英社, 2001.
- , 訳『アンの愛情』L・M・モンゴメリ作, 東京 : 集英社, 2008.
- , 訳『アンの青春』L・M・モンゴメリ作, 東京 : 集英社, 2005.